

白木屋文書

A 1

~~44~~ 52

家訓示合之寫

御每一の寫

要	年 代	内 容	表 題
袋入り (袋表「御示レの字」裏「北見勢」)			家訓示合之寫
	数 量		

表訓示合之寫

家刻示合之永録



27626

一近來高内幸次才小六才成初

人氣為寺打柳外店く是毛干夏

万化白候を畫し我一出精相廊

江中徳来と質素小は致以時高小

以得名油乃成かた紀事とい

一御店之儀も元より御仁恵厚く

人々御取立を思召敷多之人敷

清石仕ひは為成き御為徳の餘

光を蒙り末く安穩に身を終め

以奉祇雅育次中<sup>い</sup>依る古来より

光中<sup>あ</sup>く憐<sup>あ</sup>く深く慈悲法徳を

専<sup>ま</sup>く内外花美を懐<sup>ま</sup>く質素

古風を本<sup>もと</sup>として御家法<sup>ごけはう</sup>と為立

是<sup>こゝ</sup>由<sup>ゆ</sup>自然と天道神佛之加

復こ忘わする事ことふく今いまふ至いたり一統いつとう

至いたる徳とく事こと不足ふそくなき時ときと飽あ

まで食たべ暖あむ看みて毛け髪かみ安やすん

事こと是こゝ全ぜん濟じ主しゅ人にん之の濟き患わづら

中ちゆう一いつかしく以もつ終はつる何なにぞと以もつ

初はつ年ねんより養やしやう食じき育いくを養やしやうり食じき

任ぢやうは結けつ構くわう始しる暮く一方いつぱう何なに不自ふじ

安やすふく具ぐ上じやう御おん恩おん賞しやうは濟き患わづら

地ぢ小せう比ひ類るいなき事こと之の如ごとく濟き患わづら

思しく復こ朝あさ暮ゆふ忘わすれ有あらむ如ごとく

愚昧たりも教訓しん不傾たふさりの儀ぎの  
大切たいせつ不たふさ相身あひまりを及およぶけの精力せいりきを  
そして相勸あひすすて戸とあり外あきく事  
に後のちるふ不たふさ心得こころえく後るふくのるふ  
御主人ごしゆじんに恩義おんぎを忘わすれ我の身み

の復かへも不辨ふせん無益むえきに御ご心こころをよせ  
自強じきやうと不たふさ来きたふ不落おち入い中ちゆう年ねんまで  
俄いに眼まなこ不たふさ相成あひな法ぽうの時とき親類しんるい地所ぢしよ  
少すく外ぐわい用ようを考かうふ人の不及ふたふたり  
因いん許きよく欺き何程いかに死しなく毒どく干かんす

不忠不孝く至る人々善悪くん  
得たる有るは得たる一統中合正路  
堅固けんこしして御主人は祈いのち奉ほう末まつ  
之く極大切小相勅さうしやく於亦者道此  
事こと不忘わすれ極先親きんは子と思ふく

負ちゆう夜や忘る事こと亦く我々の善事  
を交けはも收む限りあり又悪  
事こととまじけはも欺たぶらき計たしりかたきい  
是等の所ところ終つひく心こころは留り親の心を  
ひきく極親乃心こころ小不遠たひな極たひ

智恵ちゑも差さたりとも親おやの心こころも背そむき  
以もつ者ものハ生なま涯がひを身みに修おこり不おこ中ちゆう免めん南  
今日けふ云い故こ障さう云い事ことハ相あひ勅とく以もつ得とく志  
忠ちゆう義ぎも者もの行ゆも時ときハ心こころ只ただ心こころ直ちゆう  
を本もととして御ご家け風ふうと大だい切せつよ

相あひ身みりり平たいに内うち外そとハ實じつ意いを身み  
身みを情じゆうと慈じ悲ひと堪かん忍にんを忘わすれれ故  
精せいく出い精せい相あひ勅とくで沙さ中ちゆう事こと  
一いつ濟けい仁にん意いと夫おのハ怨おん心しんとして眞ま利りを  
志し以もつ我がの信しんと念ねんを今いまもその志しとい



是も天命運のんれかゝる自然とを  
種こが 形かた 来きて後悔致しせしを其  
時とき 小こ 玉たまり均なる事ことあり然しかるに  
お  
心こころ 氣きと甘あまたれ我われより忍しのむ  
出い 身みを考かふものも有ある亦またいん

乃すなは 故ゆゑひあり爰こゝりて大おほ 病やまとなり  
後のち 小こ 命いのちを考かふ或あるは四よ 行ぎやう 飛とり  
いいらも不ふ 時とき 災さい 難なん 重おもり 老らう 衰さい 此こゝ  
二ふた 矣や 窮きゆう 難なん 儀ぎ 小こ 及およ 不ふ 諫かん 之こゝ 也  
皆みな 是こゝ 天てん 道だう 自じ 然ぜん 之こゝ 理り 下した 必かなら 事こと 也

是等々幸我。身に移し終く  
思慮て身之事。今殺不思儀  
此周縁にて。所為徳の所主人  
仕以儀誠心肯か。事事以海  
名爰小おめで。身分く。本意誠

とけ父母乃心。達一に。松何様も  
一心を固り大切。相勅て。中。以。程  
亦病身。よ。至。時。何。事。を。成。然。  
身。以。君。身。養。生。く。事。常。心。  
急。下。ま。之。以。先。病。心。多。く。口。り

夏<sup>あつ</sup>くも中<sup>ちゆう</sup>に清<sup>せい</sup>む飲<sup>いん</sup>食<sup>じき</sup>小<sup>せう</sup>氣<sup>き</sup>を付<sup>つ</sup>  
中<sup>ちゆう</sup>一<sup>いつ</sup>過<sup>か</sup>酒<sup>しゆ</sup>大<sup>だい</sup>食<sup>じき</sup>を思<sup>し</sup>お情<sup>じやう</sup>く時<sup>とき</sup>く  
暑<sup>あつ</sup>きと心得<sup>こころえ</sup>そ外<sup>ほか</sup>不<sup>ふ</sup>養<sup>やう</sup>生<sup>せい</sup>そ  
極<sup>ごく</sup>行<sup>かう</sup>亦<sup>また</sup>食<sup>じき</sup>を勞<sup>ろう</sup>して心<sup>こころ</sup>氣<sup>き</sup>の疲<sup>つか</sup>れ  
より大<sup>だい</sup>病<sup>びやう</sup>と成<sup>な</sup>るものふに清<sup>せい</sup>む食<sup>じき</sup>分<sup>ぶん</sup>

清<sup>せい</sup>淨<sup>じやう</sup>ふして邪<sup>じゃ</sup>なく平<sup>へい</sup>等<sup>とう</sup>胸<sup>ちゆう</sup>中<sup>ちゆう</sup>  
迷<sup>ま</sup>よて胃<sup>い</sup>之<sup>の</sup>幸<sup>さい</sup>一<sup>いつ</sup>危<sup>き</sup>角<sup>かく</sup>脾<sup>ひ</sup>胃<sup>い</sup>腎<sup>じん</sup>  
肝<sup>かん</sup>乃<sup>の</sup>痛<sup>いた</sup>むそ極<sup>ごく</sup>百<sup>ひやく</sup>能<sup>のう</sup>の各<sup>かく</sup>治<sup>ち</sup>ふ  
晴<sup>はる</sup>の幸<sup>さい</sup>のそくは月<sup>げつ</sup>並<sup>なら</sup>ひ不<sup>ふ</sup>及<sup>じつ</sup>す  
そ外<sup>ほか</sup>各<sup>かく</sup>治<sup>ち</sup>ふ極<sup>ごく</sup>意<sup>い</sup>して一<sup>いつ</sup>統<sup>とう</sup>安<sup>あん</sup>全<sup>ぜん</sup>

を祈り来く身は終りを樂と  
して急疾に波乃志動お勵  
ては事

一 近來世に六十度朽極危角表  
をとり見侍を存りの極成り

飲食衣類等の於る上品とぬ進  
奢り小増長一依之所なく儼  
自然とも風儀相交り世間を  
りを見て不我念まは移りの事  
而長風を操し志入候けし一統

能く相心得て中より右に次第を  
近年元中衣類に格を格外  
お富の事尤年数を双格式  
御定首之に得るも年よりお成同  
品多く相格行亦整年毛格毎

綿服類に後ハ何程格に考へ至く  
格に始末甚以未熟く至るに依之  
自分自身に合はく外不直至終  
く取勘是合甚急変相成氣く  
毒く事より行亦年数より合

暇に拜借毛て有之に而乞以近來  
免有之の分不<sub>レ</sub>お成何分至終<sub>レ</sub>之  
勤定出兼不<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>良<sub>レ</sub>より後悔  
千百といふも何乃<sub>レ</sub>珍<sub>レ</sub>なき<sub>レ</sub>次<sub>レ</sub>才<sub>レ</sub>とい  
想<sub>レ</sub>脚<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>勤<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>候<sub>レ</sub>衣<sub>レ</sub>類<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>角<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>

皆<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>品<sub>レ</sub>として<sub>レ</sub>拜<sub>レ</sub>借<sub>レ</sub>致<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>外<sub>レ</sub>數<sub>レ</sub>月<sub>レ</sub>  
代<sub>レ</sub>煙<sub>レ</sub>草<sub>レ</sub>鼻<sub>レ</sub>紙<sub>レ</sub>亦<sub>レ</sub>近<sub>レ</sub>結<sub>レ</sub>搦<sub>レ</sub>よ<sub>レ</sub>汚<sub>レ</sub>賄<sub>レ</sub>  
は<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>外<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>お  
涙<sub>レ</sub>で<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>乞<sub>レ</sub>等<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>篤<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>相<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>て  
是<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>終<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>親<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>憐<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>より<sub>レ</sub>末<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>所

乃借おしかりり此種しゆとして所居しよに居ゐる  
れは事ことよは得えば身みの末すえと考かん儉けん約やく  
を心こころ急いそ自分自分分ぶんく身みよよ事ことままと付つ  
て身み中ちゆうに然しか一統いつとう夫そ道みち神かみ佛ぶつく冥めい  
理りを忍しのれ信しん心しん忘わする事ことままく言こと急いそ

自然じぜんく道みち理り道みちれのれのからきき事ことを辨わん  
然しか物ものの不ふ益えき養やう末すえに成なる中ちゆう極ごく平へい  
等と氣きを射しは事こと肝かん要やうに何なにれ七しち結けつ  
操そうく所しよ主人しゆじんは相あ動どう朝あ暮ぼ物ものの不ふ  
自じ由ゆうと云いふ以もつ以もつ百ひやく事こと潤うる澤たくと云いふと

して金銀衣類を心なく賣し  
事ハ穢し世勿辨次才進く此の  
買加を悲し多入窮を拓く事ハ  
依之向後金銀衣類ハ勿福徳  
幸後り相成不中振古來格

合と以相定ても余ハ堅て為至用事  
一高家から高内事一通り  
大切成事と云く以清ハ朝暮是  
ら己打込一披ハ相勵出精て有之  
幸ハ先賣解く故不被疎云



く振舞等不作振舞品くく候  
亦常く云悔忘心懸執行て肯之  
事肝懸に才一高人の氣の事  
ふりそく随分所成引下ヶ百  
事を慎む律義古苗心て来

和よ波一電想く音聲心得  
何事之念入れ叮嚀して少も  
素略事実意を尽し一に事  
先有実意なき事心預をそく  
百事爰り易くは行御用く事

其 涉 勝 自 考 入 吏 早 く 涉 用  
く 君 之 合 以 極 珍 禮 口 亦 柳 之 品 別  
して 意 之 付 諸 事 先 極 涉 務 之  
宜 及 極 於 不 盡 之 事 之 極 隨  
分 深 切 之 事 一 一 以 中 以 勉 肝 涉 密

極 旨 之 操 持 之 事 隨 分 兼 和 應 勉  
小 之 實 意 之 以 意 意 之 結 び 以 根  
心 意 中 之 實 事 之 志 一 一 解 り 意 意  
之 以 心 易 之 操 持 之 以 之 以 自 然 之  
之 禮 之 相 成 印 之 不 宜 及 之 事 之

出来りよのふひ召能く相心得候  
略く候云く振別り御出く言と御  
帰り候時、振別頭と下々急度  
懇懇と致しては中ひ何れも皆  
御主人の御容極方ふ心得候

是く大切相心得可申候事  
右之趣能く相心得永久大切相得  
下中申候所、此中一致相勵不  
替弥増之御懇榮を奉祈候事  
是則、是も不致く安泰を願ふ

東大・経済  
白木屋文書  
A1  
4452

事  
記  
也

